

南部陽一郎君の思い出

前川 甚

松本社会教育会副会長（昭58（現））

南部陽一郎君は、松本小学校の前身進放尋常小学校の第四十回（昭八年）卒業生です。

当時の学校は、現在の進明中学で（面積は現在の約二分の一）講堂を中心に二階建学舎二棟を連ね、屋外運動場を桜の並木で囲み、桜花爛漫花吹雪が舞い、厚い葉影が炎暑を和らげ、いながらにして紅葉を画かれ、学窓からは遙か田園地帯をとおして白山連峯を仰ぐ寂かな風情に恵まれた良い環境でした。

紺サージに白えり開襟の上衣と半ズボン、上衣の背中が割れて下方がバンド締めになったポッチャン、ス
タイル、黒皮のランドセルを背負い、長いひさしの慶応帽子をややあみだにかぶり通学してきたのが南部陽一郎君です。

着放し、汚れ放し、折目もない黒服姿の私達と比べれば掃き溜に鶴が舞い下りた程に目立った存在でした。しかも頭が悪いのなら私達も救われるのですが、色白で理智的な顔、やることなすこと品行方正、成績抜群で一を聞いて十を知る優等生でした。

二年生の終りに県外校から転校してきたのですが、編入面接の時に先生から世界で一番小さな国は何処？

と聞かれ、即座に「モナコ王国」と返答したというのが語りぐさとなっています。彼の家は学校の裏（現進明中学校東側）に在って、レンガ色のトンガリ屋根に白壁の洋館づくり、玄関はドアでした。

お父さんは福井高女の英語教諭、お母さんは色白のしとやかな物腰の人で、一般的にいうオートツアン、オカミサンではありませんでした。家族は妹さんが二人の五人家族でした。

書齋には壁一面に和洋書が一パイに立ち並び、科学雑誌がうす高く積まれていて、彼は科学雑誌に大きく興味を持っていました。

東海道本線、東京大阪間に超特急「ツバメ号」が運行し始めた頃、田舎者の私達には電気機関車の知識はなく、蒸気機関車が牽くものと思ひ議論して彼の家で雑誌を見せられて納得したことや、三年生の頃昼食後の休憩時間に目醒時計を持ってきて分解し組立てていたこと、私達は勿論家の母に話して家中の者が吃驚仰天していたことを憶えています。

夏休みの宿題などには、長野県上高地附近の縮尺立体模型を作ったり、長さ五〇糎、高さ一米程のヨット模型を作ったりして提出しました。しかもヨットは帆と舵が連動して直進する理論的な装置をつけたり、当時の私達には考えもおよばないことを既にかつ試みていました。現在の進明中学裏の白山神社境内に大きな溜池があって、そこがヨットの帆走テスト、コースでした。

また夏休み中の神戸、芦屋の親戚への旅行記として、当時の海を望む芦屋の風景、高級住宅地の水洗トイレの珍らしさを詳細に作文してコンクールに入賞しました。

五、六年生になると算数などは、中学で習う x 、 y 方程式を使って解答しており文、理、数全科目に秀で

た神童でした。

中学一年の頃は、帰り道の八軒町通り高沢自動車整備工場前でシボレー、フォードなどのエンジンを見ながら六気筒エンジンの説明をしたり、新車のシボレーが初めて入ったとき「ツィV型入気筒だ」と感動していました。

諺に「梅檀シキクシは嫩葉アタバより香し」と謂いますがまさしく彼の幼少期に当嵌まる言葉です。

五十四年五月母校藤島高校の演壇で後輩を前にして「私は何か他人と違ったことをやってみたい、と思つて米国に旅立った。皆さんも人類の一員としての自分を自覚し、国際的な活躍をして欲しい」と話しています。

少年時代を過した学舎で、郷土が産んだ吾国の政治経済の先覚者松平春岳、橋本左内、山本条太郎、大村卓一、広瀬弥助の偉業を学び、内閣総理大臣岡田啓介の訓話を目の前で聞き、彼の向学心は科学探究へと志向したのでしょう。

彼の努力がはじまりました。福井中学を開校以来の良い成績で入学し四年で第一高等学校、東大物理学科へと進み、当時の若者が通らねばならなかった軍隊生活は工兵隊で一年間を首席でとおし、昔日のひ弱な面影は見られなくなりました。

さらに大阪市大教授から研究環境を求めて渡米、三十一年より現在までシカゴ大学教授として素粒子論の研究を積み、世界物理学界の第一人者としてノーベル賞の選考委員をつとめる権威者の地位を築きあげました。

この物理学界への貢献を称えて日本政府は、五十三年文化勲章を授与し、五十四年福井市は郷土の誇りとして、名誉市民第一号を贈りました。

また五十八年七月には、ホワイト、ハウスで、レーガン大統領から物理学上、素粒子とその相互作用の発展に貢献したことを称えた米国で最高の科学勲章「ザ、ナショナル、メダル、オブ、サイエンス」を贈られました。

この地元松本校区から、多くの大先覚者に続いて、世界の科学者が輩出しました。松本区民としてこんな名誉なことはありません。永年の研さんを懐い「おめでとう」と最大のお祝いを申し述べます。

たまたま松本社会教育会三十年史が編纂されるにあたり、彼の偉業を永く後輩諸兄に語り伝え、彼の努力のあとを研鑽の資として、さらに多くの優秀な後輩諸士が各分野でご活躍されることを希って「思い出」の筆をおきます。

この記は、南部陽一郎君と中学卒業まで昵懇であった塩谷秀三、吉田英男両君のご協力をいただきました。ありがとうございます。お礼を申し上げます。